

neo

⚕ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ⚕

Summer
2026

#11



穏やかな時間を医療と共に。

福井大学医学部附属病院
整形外科 教授

福井大学医学部 器官制御医学講座
整形外科 教授

中嶋 秀明

ふくい内視鏡・胃腸クリニック
院長

宇賀治 良平

福井大学医学部附属病院
薬剤部 教授

津田 真弘

02

Doctor's Hand

福井大学医学部附属病院 整形外科 教授
福井大学医学部 器官制御医学講座 整形外科学 教授

中嶋 秀明

12

Reliable Doctor's

ふくい内視鏡・胃腸クリニック
院長

宇賀治 良平

18

Professor's Voice

福井大学医学部附属病院 薬剤部
教授

津田 真弘

STAFF

Project Design 坂口 俊克
Writer 上乗 繁能／大廣 涼
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人／西村 恭子
Cover Design 101%

発行／スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
TEL: 03-3518-5356 FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

命と健康を守る医療を支える
ALSOKは、とことん、あなたのために。



I'm ALSOK!

24時間・365日。
見守り、そして駆けつけます。



ALSOK北陸株式会社

代表取締役会長 森 本 昇 代表取締役社長 久 島 泰 志

本 社 石川県金沢市松島1丁目41番地 TEL.076-269-8686

福井支社 福井県福井市成和1丁目1504番地 TEL.0776-23-1306

スタッフ募集中





HIDEAKI NAKAJIMA

#University of Fukui Hospital

Doctor's Hand



高難度の手術に挑む

脊柱側弯症という病気がある。子どもにも多く、本来なら真っ直ぐなはずの背骨が、左右に曲がったり、ねじれたりしてしまう。全体の80〜90%は原因がわからない「特発性」の側弯症で、小学校高学年から中学生の成長期にかけて、とくに女子に多く発症するとされる。

背骨の曲がりが増えると、将来的に腰痛や肺活量の低下などの呼吸器障害を引き起こすことがあることから、変形した脊椎を矯正する手術が行われる。重要な神経や血管の近くに金属の固定材料などを挿入するケースが多く、より高度で安全性の高い技術が求められる。

「2〜3ミリしかないところに5〜6ミリのネジを挿入する世界なので、少しの誤差も許されない、非常に難易度の高い手術です」

脊柱側弯症の変形矯正手術を得意とする中嶋秀明教授は、手術の難しさをそう口にする。脊椎脊髄疾患の手術は、患者からすると「術後に手足の痛みやしびれ、手指がうまく使えない、歩きにくいなどの機能的な障害が生じ

ないか」不安がつきまとう。しかし近年は、手術における低侵襲化が確立され、痛みや痺れに対する新規の薬物療法やリハビリテーションも大きく進歩している。

「ここ数年で導入したO-armや人工関節用ロボット(Mako)などを駆使して、高難度症例を含めて最新で、安全かつ質の高い医療が提供できていると思います。2024年1月に、北陸ではまだ2台しか導入事例がない、O-arm術中イメージングシステムを採用して以来、高精度で確実な手術が可能になりました。安全性も飛躍的に向上しています」

O-armシステムは、脊柱の手術に特化したもので、脊柱側弯症の矯正手術などで力を発揮する。可動式のポータブルCT撮影装置で、患者を手術台に乗せたままCT画像と同様の画像を撮影できるのが特徴だ。可動式なので「手術室間の移動もしやすく、被ばく線量も通常のCT装置の7分の1程度に抑えられる」という。

最後の砦になれなかった時代

「もともと当医局は脊椎が強いこともあって、O-armによる脊椎関係の手術と、人工関節用ロボットMakoによる関節の手術が増えたことが、年間の手術件数の増加につながっていると思います」

そう強調する中嶋教授は、臨床のローガンとして「福井の患者は福井で診る」を提唱する。そこには特別な思いが投影されている。

「難症例において、福井大学医学部附属病院は『最後の砦』として積極的に対応すべき時に、できなかった経験がある」からだ。

その象徴ともいえるのが、中嶋教授にとつての脊柱側弯症だった。子どもの脊柱側弯症は、成長期の早期発見と定期的な経過観察が何よりも重要とされる。一度手術をすると、大人になるまで定期的な経過観察をする必要があり、そのため患者は生活圏のある地元で手術、治療を望むケースが多い。

しかし「10年以上前、大学病院でありながら当院ではこの手術を引き受け

られなかった」と振り返る。

「整形外科は入局者が少なく当時、脊椎専門の医師は私一人でした。脊椎脊髄外科指導医でしたが、資格を取ってまだ1年ぐらいいました。福井県はその頃、脊椎脊髄外科指導医が全国で最も少なくて私を含めて6人ぐらいいただったと思います。難しい症例が紹介されても、自分の臨床経験がまだ追いついていない。とくに2015年からほぼ2〜3年間、脊椎脊髄外科指導医が私一人になった時期があって、とても引き受けられる状況ではなかったのです」

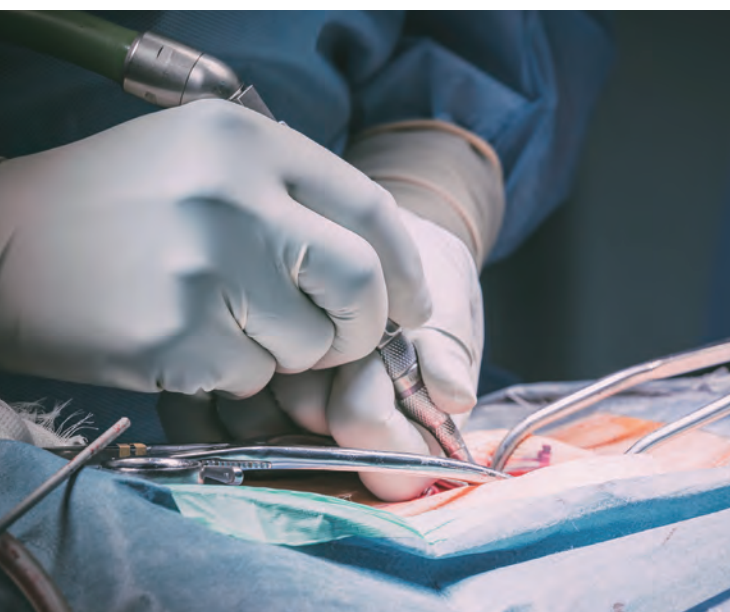
教授によると、自らの経験不足に加え「就任されたばかりの教授(第3代)が、わずか数カ月で不在となり、予想もできない異例の事態にどうしたらいいかわからない状況に追い込まれた」医局の事情もあったようだ。

全国行脚で力をつける

思い悩んだ中嶋医師の救いになったのが、全国の脊椎脊髄外科とのつながりだった。

「2〜3年間は、全国行脚しました。直属の上司であった第3代教授自身もともと顔の広い方で、全国の先生方





との交流やアメリカへの留学を勧めてくださいました。私は、その前の第2代教授の時代に基礎医学の大切さをみっちり仕込まれました。毎日、日付が変わる時間まで病院や研究室に残り、急性脊髄損傷に対する脊髄再生や、圧迫性脊髄症や神経障害性疼痛の病態研究、脊柱靱帯骨化症の進展機序や治療研究などに打ち込みました。厳しかったですが、のちの自分を形作るうえで、とても貴重な経験だったと思います」

これまで研究と臨床の両輪で取り組んできたものの、同世代の医師たちが、第一線で活躍されている話に触れると、自分もより高度な手技を身に着けたいという思いを募らせた。そして中嶋教授は交流のあった先生方を頼りに全国各地の現場に向かいだしたのだ。

「20箇所ぐらい回ったでしょうか。

海外の実習にも参加しました。全国のトップランナーの先生方に、臨床上の疑問があれば積極的に教えを乞い、メールで何度も質問させていただいたので

るまでになったことで、光あたりはじめたと感じます」

共同基礎研究と 産学官連携による臨床研究

中嶋教授自身が、今最も必要だと感じているのは「人を育てる」ことだ。自身が、福井大学出身の生え抜きの診療科長であり、一人でも多くの若い医師が地元に残り、福井発の医療を支える人材として活躍できる。そんな環境

づくりのために、地域との連携がこれまで以上に重要だと考えている。

「人を育てることは、もはや当院だけの問題ではありません。地域全体を見渡しても、たとえば北陸にある大学の医学部を卒業しても、地元に残らない医師が増えていきます。医師不足が各診療科で進み、仮に地域の医療機関から医師の派遣要請があっても、簡単には応じられなくなる時代がすぐそこまできています。今は当院と関連病院や地域の医療機関、開業医さんとの病診



中嶋 秀明 なかじま・ひであき

福井大学医学部附属病院 整形外科 教授
福井大学医学部 器官制御医学講座 整形外科学 教授

【略歴】
2001年 福井医科大学卒業、同整形外科入局
2006年 福井大学医学部附属病院 整形外科 助手
2007年 医学博士取得
2017年 福井大学医学部 地域高度医療推進講座 講師
2020年 福井大学医学部 整形外科 講師
2023年 福井大学医学部 整形外科 准教授
2023年 University Centre Shrewsbury (University of Chester) 留学
2026年 福井大学医学部 整形外科 教授

連携は良好でも、入局者を増やさない限り、今後は医師の派遣要請があっても難しくなるかもしれません」

地域医療を支えていくために、中嶋教授が見据えているのは「大学間の垣根を取り払い、同じ診療科同士で連携していく」ことだ。教授同士の個人的なつながりを活かし、「今後、何かしら連携ができないかを模索していく」ことを考えている。

脊椎脊髄外科指導医として、人知れず努力を積み重ねてきた中嶋教授は、「地方大学でありながら基礎研究をしっかり行っている教室だと全国的に認識されている」と自信を示す。それは、先人教授陣から学んだ教えや実績が、浸透してきている現れでもある。その一つが、第4代教授時代に培われた東京大学との共同研究だ。目下、骨粗鬆症や脊柱靱帯骨化症に対する薬物治療の共同基礎研究や、産学官連携による臨床研究として、変形性膝関節症手術に用いる新しいプレートの開発などを進めている。

「薬を提供してもらって骨粗鬆症を予防したり、脊柱靱帯骨化症の進展を抑制したりできないかの研究を行っています。脊柱靱帯骨化症は国指定の難

病で、私たちは厚生労働省の特定疾患の研究班に入っています。全国82大学医学部の中から特定の大学しか選ばれないのでとても名誉なことです。靱帯骨化を抑制する薬物はまだ開発されていません。もし私たちの共同研究が開発につながれば画期的なことですよ。今後、他施設共同研究も含めて、さらに研究を充実させていきたいと考えています」

臨床と研究活動の両立

かつて先人から指導された「医学は、基礎医学という根を張ることで臨床医学という幹が育ち、自分自身の実を結び、本当の実力を身につけることができる」との教えを、中嶋教授は今も大切にしているという。他人が敷いたレールの上をただ歩いていても、本当の実力は身につかない。そのことを身をもって体験しているだけに、若い医局員に対しては、臨床はもとより研究の大切さを説く。

しかし、働き方改革が進む中、多忙な臨床と研究活動をいかに両立させていくかは難しい。教室の伝統をどう次世代へ継承していくかも、重要な課題だ。

「私自身、全国行脚をした時や、これまで周りの多くの人たちにたくさん助けられたと思っています。でも改めて思うのは、その時は医師としても研究者としても、人間としても、もう一段も二段もステップアップするために、私自身が頑張らないといけない時期でもあったと思います。人生の中で、今が頑張る時という期間は誰にでもあるはずですよ。その時を乗り越えてはじめて道が拓ける。そういう思いを伝えていければと考えています」

最新の医療を大学病院としていち早く取り入れ、一人でも多くの患者に届ける。中嶋教授と若手医師たちの挑戦は、日々続けられている。



フードテックジャパンの提供サービスとして

- ・レストラン・カフェの展開
- ・売店・コンビニの展開
- ・自動販売機の設置
- ・入院セットのレンタルサービス
- ・床頭台のレンタルサービス



食「薬膳」の力で 職員・患者様に活力を！

「体に良くて、おいしくて、」



主な出店病院

- | | |
|--------|--------------------|
| 東北地区 | 仙台医療センター・JCHO仙台 他 |
| 東京関東地区 | 東京都健康長寿医療センター 他 |
| 三重地区 | 三重中央医療センター 他 |
| 大阪地区 | 大阪医療センター・岸和田市民病院 他 |
| 兵庫地区 | 神鋼記念病院・姫路医療センター 他 |
| 九州地区 | 九州医療センター・JCHO九州病院 |

☎ 078-783-6135

本 社 〒655-0003 神戸市垂水区小東山本町2丁目2-1トキタビル3F

株式会社フードテックジャパン 公式ホームページ

<https://www.f-t-j.co.jp/>



「つらくない内視鏡検査を」

地域医療の現場からメッセージを発信し続ける

ふくい内視鏡・胃腸クリニック 院長 宇賀治 良平

おなかの中から 福井を元気にする。

患者の立場から見れば、胃カメラや大腸カメラといった内視鏡検査は、決して楽なものではないかもしれない。以前に検査した際、痛い・苦しいと感じた人ならば、なおさら受診のハードルは上がる。たとえ検査を受けたことがなかったとしても、人伝えに経験談を耳にし、身構えてしまう人もいることだろう。一方で、消化器系の早期発見に関して内視鏡検査の有用性は明らかだ。40歳を過ぎたら胃カメラは1年から2年、大腸カメラは3年から5年に1度の頻度で実施することが推奨されている。

このような実情をふまえ、地域医療の最前線で奮闘を続ける一人が、ふくい内視鏡・胃腸クリニックの宇賀治良平院長だ。同クリニックのコンセプトは、「おなかの中から福井を元気にする」。宇賀治院長は、日本消化器内視鏡学会専門医として培ってきた技量を発揮し、少しでも「つらくない内視鏡検査」の提供に心を砕いている。

市中心部の福井市宝永で2024年7月にクリニックを開院してから約2年、宇賀治院長が患者一人ひとりと真摯に向き合い続ける中で、その思いは徐々に浸透している。福井市やその周辺市町に加え、嶺南地域から足を運ぶ患者も少なくなく、1日に担当する内視鏡検査は15、16件にも上る。消化器

内科だけでなく、かかりつけ医として、内科や肛門疾患などの診療にも力を入れており、福井県立病院や福井県済生会病院などの県内の基幹病院とも連携を深めながら、きめ細かなケアで地域住民の健康を支えている。

細径内視鏡やAIを活用 充実した環境で最適な診療を

ふくい内視鏡・胃腸クリニックは、「つらくない内視鏡検査」を進めるために設備機器の充実に力を注ぐ。たとえば、細くしなやかな5・8ミリの細径内視鏡を採用し、胃カメラの場合、患者の体質や観察部位に応じて経鼻、経口を選択できる。胃カメラ、大腸カ

メラはAIによるサポート機能も備えており、見落としを防ぐとともに、専門医の目と組み合わせることで病変の検出率を高めているのも特色の一つだ。苦痛のない安全な検査を行うため、鎮静剤（レミゾラム・ミダゾラム）を使用するケースもあり、毎回、患者一人ひとりの量・程度などを細かく記録し、個人に適した状態で検査ができるように心を配っている。検査の前後に安心して過ごせる環境も整える。リカバリーブース4室を完備し、内視鏡を受けた後の体調に不安を抱える人は、専用ルームでゆっくり休むことができる。大腸カメラの受診前に下剤を飲むスペースとして、天井が高く、やわらかな照明で落ち着ける内視鏡待合

室もあり、トイレは行きたい時に利用できるよう、検査を受ける方には専用のトイレを用意し、院内に計7カ所のトイレを用意した。

加えて、仕事や育児などが忙しく、平日はなかなか来院できない人に向けて、土曜午前中も内視鏡検査を受け付けている。WEB予約・問診表で待ち時間の軽減にも努めており、患者第一の姿勢を貫いている。

複数の管理栄養士体制で 食事・栄養相談に注力

ただ、設備機器やシステム以上に、宇賀治院長がクリニックの財産と口にするのが「人」である。「ドクター一人で医療機関は運営できません。当クリニックで働く7人のスタッフ全員が患者様を考えた行動を実践してくれています」。宇賀治院長は自信をもってこう話し、看護師や医療事務といった医療のプロがチームとしてサポートできることが、クリニック最大の強みだと言葉に力を込める。

クリニックで働くスペシャリストには、2人の管理栄養士も含まれている。「生涯食事を楽しむこと」を目標に、糖尿病や高血圧症、摂食機能・嚥



宇賀治 良平 うがじ・りょうへい

【略歴】
2009年 川崎医科大学卒業
2011年 川崎医科大学肝胆膵内科 助教
2012年 会津中央病院消化器内科 医師
2014年 千葉徳洲会病院消化器内科 医長
2019年 新東京病院消化器内科 副部長
2022年 福井県立病院消化器内科 医長



下機能の障害などに悩む患者の食生活について適切なアドバイスを送っている。ちなみに、複数体制で栄養のプロを配してきたのは、クリニックを開院した時からだ。そこには宇賀治院長の強い思いが込められている。

「開院前は、地域の基幹病院に勤務していました。その時は、どうしてもたくさんいらっしゃる患者様の診療だけで手一杯。食事面からもサポートできれば、病気の予防や改善にもっと貢献できると考えていました」。

現在は、クリニックでの食事・栄養相談は保険診療の対象となる疾患の対応が中心となっている。ゆくゆくは、「下痢や便秘気味だ」「年齢を重ねて食が細くなってきた」など、もっと気軽に生活に密着した相談に応えられる場を思い描いており、一層のサポートに取り組んでいく方針だ。

祖母の死への後悔から 消化器内科の道へ

スタッフと歩調を合わせ、ワンチームとなり、「つらくない内視鏡検査」を中心に、よりよい診療体制の構築に知恵を絞る宇賀治院長。その原点をたどると、時計の針は研修医時代にまでさかのぼる。

い出が残る地で新たなステージを迎えている。

震災後の福島で過ごした 2年間で成長につながった

宇賀治院長は消化器内科医となつて16年がたった。その道程を振り返ると、いくつもの転換点があった。なかでも、忘れられないのが、会津中央病院（会津若松市）に勤務した2012年からの2年間だ。東日本大震災後、福島県内では深刻な医師不足に直面しており、全国の医療従事者に声がかかる中、若き宇賀治医師も手を上げた。「少しでも力になればとの思いがありました。同時に、1件でも多く内視鏡の経験を重ねることで、消化器内科医として成長できるのではないかとという期待も大きかった」という。

実際、現場では目の回る忙しさが待ち構えており、医師2人で1日に40件ほどの検査を担当する日が続いた。そんな状況に当時20代だった若手医師は無我夢中で食らいついた。通常業務が終わった後、体は疲れていても病院に残り、内視鏡の操作技術を磨くための練習に取り組むこともしばしば。ときに、急患の対応が舞い込み、そのまま

宇賀治院長は福島市で生まれ育ち、川崎医科大学（倉敷市）で医師免許を取得。同大学の附属病院で医師人生の一步を踏み出した頃、郷里の祖母が亡くなった。死因は消化器がん。見つけた時には、既にがんは進行した状態だったという。発見が遅れた要因は、過去に受けた内視鏡検査でつらい思いをした祖母が、長年にわたって検査を避けてきたからだ。

「早く見つけることができていれば、力になれることがあったのではないか」。医師として、家族として、宇賀治院長の心に芽生えた悔恨の念が消化器内科に進む決め手となった。以来、わき目もふらず、消化器内科医として研鑽を積んできた。出身の大学病院を皮切りに、東北や首都圏の医療機関など、自分自身が成長できる場に身を置き、腕を磨き続けてきた。

そして、2022年に福井県立病院消化器内科医長として、ふるさと福井へ。その2年後、地域にもっとも密着した場所、より多くの人に内視鏡検査を気軽に受けてほしいと、ふくい内視鏡・胃腸クリニックをスタートさせた。開院場所に選んだのは、かつて宇賀治院長の祖父母の住まいがあったところだ。祖母の死が背中を押した消化器内科医としての歩みは、祖母との思

朝を迎えることもあった。

「福井と福島は気候も似ているところがあって、食べ物もおいしいし、地元の人たちも本当に温かい。このままここに骨をうずめてもいいかと思っただけです。福島の皆さんと接する中で、人の役に立つ医師のやりがいを見つけたらと思っています」。

医師の道も「守破離」 まずは基礎の徹底が肝要

半面、福島では医師としての力不足も痛感した。教えてくれたのは、現在、新東京病院（松戸市）で消化器内科主任部長兼内視鏡センター長を務める長浜隆司先生だ。応援で福島県の病院に通っていた長浜先生がある日、会津中央病院を訪れ、宇賀治院長の技を見たり、つぶやいた。「全然、だめだな」。消化器内科のエキスパートからの一言は若手医師の心を揺さぶった。「確かにまだまだな部分はあったと思う。それでも消化器内科の世界で、経験も積んできた。そんな思いを胸に、宇賀治院長はその日の診療が終わると長浜先生のもとに直行し、「何がだめなのか教えてください」と訴えた。

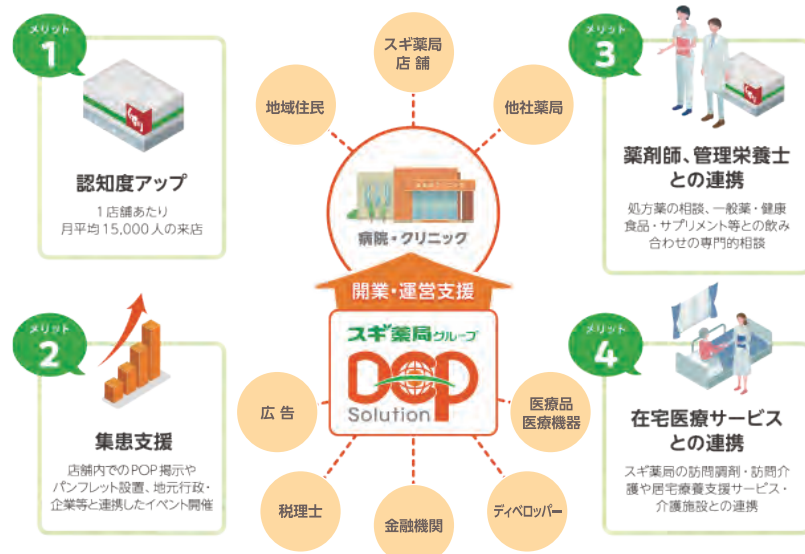
この出会いから師弟関係が始まっ

D C P ソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。

ドラッグストア併設で 理想の開業を！

D C P ソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



拠 点

- 関東エリア(本社) ●東京都千代田区鍛冶町一丁目7番6号
ヒルトップ神田ビル
- 中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
- 関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号
新大阪第5ドイビル13階
- 北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます



0120-911-545

平日(土曜・日曜・祝日を除く)の9時00分～18時00分

<https://dcp-sol.com/article/docvoice/>



守破離に当てはめるならば、師のものとを果立ち、ふるさとで地域医療の最前線に立つ今は、「破」から「離」へと移っていく段階にあるといえるだろう。一人ひとりの患者と丁寧に接する日々を通して、宇賀治院長の意識も少しずつ変化している。以前は医師自ら

地域に根を張った 情報発信をこれからも

た。身近に接する中で思い知らされたのは、視座の違いだった。「私がセンチで思っていたならば、長浜先生はミリ単位で考えているんです。見ている世界の差を、これでもかというくらい教えられました」と振り返る宇賀治院長。その後、千葉県内の病院勤務や新東京病院での内視鏡センター立ち上げなど、長浜先生と行動をとるに、師弟関係は10年近くに及んだ。「内視鏡検査の技術を磨くには、単に場数をこなせばいいわけではありません。大切なのは『守破離』。まずは師の教え、型を守って基礎を徹底的に身につけることが必要です」(宇賀治院長)。質の高い検査を目の当たりにする中で、確かな技術を着実に、自分のものとしていった。

が先頭に立ち、積極的に情報発信していくことにあまり乗り気ではなかったが、最近はその必要性を感じているという。

「自分自身が得意ではないからと、正しく、大事な情報を広めていくことに二の足を踏んでいる場合ではないと気づいたんです。検査で病気を早期発見できることが、本人にとっても、家族にとっても一番いい。ならば、つらくない検査ができることを知らない人、もつと言え、自身の健康に興味のない人に、いかに発信し、受診につなげていくかを考えていきたい」と、これからについて宇賀治院長は思いを語る。そんな願いも表れているのだろう。ふくい内視鏡・胃腸クリニックのホームページを開けば、内視鏡検査の中心やメリットなどが細かく書かれてあり、中にはオリジナルマンガで胃カメラや大腸カメラについて紹介するページもある。

一人でも多くの人に内視鏡検査を受けてほしい――。地域に根を張るクリニックで、こうメッセージを送る宇賀治院長。その目には、首尾一貫して変わらない固い決意が宿っていた。



津田真弘

福井大学医学部附属病院 薬剤部 教授
MASAHIRO TSUDA

大学病院の中で、この10年で役割が劇的に変わったのが病院薬剤師だ。医薬分業が進み、薬の調剤から薬物療法を最適化する専門職へ。2025年11月、福井大学医学部附属病院薬剤部の教授に就任し、高度な薬物療法の専門集団を率いる津田真弘教授に密着した。

薬物療法を最適化する専門職

病院薬剤師といえば、ひと昔前まで「薬を調剤する」のが主な役割だった。だが医薬分業が進んだ今、大学病院ではその役割が大きく変わってきている。一言でいえば、薬を提供する専門家から、病院の高度医療を支える立場へと役割が変化しているのだ。

「メインは、病棟薬剤業務といって病棟に出向いて入院患者さんの持参した薬を確認したり、ベッドサイドに行って、患者さんが薬を正しく使えるように薬効・使い方・注意点などについて指導を行います。医薬品を院内で安全かつ適正に使用していただくために、病棟の医師や看護師、その他の医療スタッフとともに、チーム医療の一員として患者さんのケアにあたっています」

教授に就任して8ヵ月余り。津田真弘教授は、病院薬剤師の基本的な役割をそう説明する。現在43名の薬剤師と調剤アシスタント、事務スタッフ合わせて総勢52人の薬剤部を取り仕切る。病院薬剤師は、病棟スタッフの一員であり、チーム医療においては薬の専門家として高い信頼を寄せられる存在だ。

がん治療、ICU、手術室、感染対策、抗菌薬管理、栄養管理など院内のさまざまな分野にかかわり、NST（栄



津田教授は、医療の最前線で高度な薬物療法に携わる病院薬剤師の存在意義を強調する。

副作用を見抜く感性

福井大学医学部附属病院では、DX化が進み、薬剤部においても調剤室の機械化により事務的な作業が格段に効率化された。それによって生まれた時間を「患者さんのベッドサイドに行ったり、医療従事者とのディスカッションなど対人的な業務にあてる」のが、今の主流だと津田教授は訴える。病院薬剤師として、主にどんな内容を話し合うのだろうか？

「薬には、必ず副作用があります。薬の

副作用については、私たちがチェックをしてケアをします。たとえば患者さんのところに行つて副作用モニタリングとして、いろいろな症状はありませんか？この薬ではこういった副作用が出る場合があります」と話をする。それについて患者さんからも副作用について思い当たることがあつたりすると、担当の先生に『副作用が出ているのでこちらの薬に変えてはいかがでしょうか』と処方提案をします。『わかりました』と変更することもあれば『このまま継続しましょう』というケースもあります。いずれにしても処方提案は日常的に行つています。薬の特徴に基づいた提案、科学的根拠に則つた提案は病院薬剤師にしかできないので、それが私たちの存在意義でもあると思つています」

ひと昔前は「医師に提案してもなかなか聞いてもらえない」時代もあったそうだが、今は、医師も多忙で「新しい治療法や新薬がどんどん開発されるので学びがなかなか追いつかない。薬のことは薬剤師に任せよう」が、自然の流れになっている。医師と薬剤師の信頼感が深まり、「処方提案すればしっかりと受け入れていただける感覚がある」ところまで迫り着いた。

そうした関係を築くうえで大前提となるのが、「病院薬剤師としての正確な知識と副作用を見抜く感性」だと津田教授は打ち明ける。見抜く力をどのようにして身につ



けるのか？

「一つは、やはり経験だと思います。いろんな症例を数多く経験し、時には失敗をし、先輩や上司からどんなことを必ずチェックしないといけないか、何が必要なのかを学びます。その積み重ねから感性が養われると私は思っています。もちろん医師に処方提案をするための論理的な思考も重要です。そういうことを含めてレベルアップしていかないと、なかなか医師からの信頼は得られるものではありません」

情報を聞き出す能力

薬物の副作用にはいろんなパターンがあつて、たとえば検査値に現れる副作用は、カルテチェックで見つけることができる。問題は、カルテからではつかみきれない副作用を、いかに見逃さずに対応するかだ。

「患者さんから情報を上手に聞き出す力というか、コミュニケーション能力も必要だと思います。患者さんには、事前に『こういう薬が出ます。副作用があるので気づいたらおっしゃってください』と伝えます。でも人によって出る、出ないは個人差があるし、出る時期が異なる場合もあります。抗がん薬治療だと、すぐに現れる副作用と、1週間後に出る副作用、1ヵ月後に出る副作用があります。抗がん薬の点滴が終わった次の日に、たとえば1ヵ月後に出る副作用

用のことを聞いても意味がありません。あるはずの副作用が出ていない場合とか、1週間後に出るような副作用が早く現れるとか、そういう時に何かを気づかないといけない。それが感性であり、患者さんとの会話や様子などから読み取る力だと思います」

抗がん薬の副作用というと、吐き気や髪の毛が抜けるなどは気づきやすいが、「体にきつい副作用ではなくても、生活の質を低下させる、気力を奪ってしまう」場合もある。そういうケースを見逃さないために、薬剤部では他の病棟であった事例などを共有し、議論をしながら対応策を探る。近年は、抗がん薬でも分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬など、新薬も数多く開発されており、それぞれ扱い方や副作用への対応、特徴も異なる。

「想定されないような副作用とか、なぜこの患者さんにはこんな副作用が出るんだろうという時もあります。ガイドラインにあてはまらない事例と出くわすこともあります。論文を探して海外ではどうかを探ったり、常日頃から科学的な視点に基づいた研究心をもつことも、感性を磨く上で重要なことだと思います」

看護師や他の医療スタッフとの情報のやりとりから気づくことも多い。津田教授が続ける。

「看護師さんは常に患者さんの近くに居てケアする立場にあるので、得られる情報



津田 真弘 つだ・まさひろ
福井大学医学部附属病院 薬剤部 教授

[略歴]
2005年 京都大学薬学部総合薬学科 卒業
2010年 京都大学大学院薬学研究科博士後期課程 修了
京都大学医学部附属病院薬剤部 薬剤師
2015年 京都大学大学院薬学研究科 統合薬学教育開発センター 特定講師
2017年 同 統合薬学教育開発センター 講師
2023年 同 臨床薬学教育分野 准教授／京都大学医学部附属病院薬剤部 副薬剤部長
2025年 福井大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長

は貴重です。患者さんは、医師に言えないことでも看護師さんには言う場合があります。たとえば今飲んでいる薬はあまり効かないとか、種類が多いせいかあまり食欲がないとか。薬に結びつく情報を聞き出してくださるので、私たちには大変ありがたい存在です」
薬剤師である前に、まずジェネラリストとして広く疾患についての理解をする。その土台を身につけた上で、がん治療や感染部門、栄養管理などそれぞれの専門性を磨く。津田教授は、これからの若手病院薬剤師たちにそんなアドバイスを送る。

福井で働く薬剤師を育てる

今後、薬剤部長として取り組んでいきたいこととしてどんなことを考えているのか？

「医療安全を守ることは最優先事項なので、医療安全は絶対に守る。もう一つは、病院薬剤師として地域との連携を図ることも非常に重要だと思っています」

病院と地域の医療機関や開業医との医療連携は必要不可欠だが、薬剤師間の地域連携を進める背景には何があるのだろうか？

「入院患者さんが、急性期の治療を

終えて退院するときに、次からは自宅や施設に戻って外来通院することになります。そのときに患者さんと関わるのは、基本的に調剤薬局など外部の薬剤師さんになります。そうすると、その患者さんが病院にいた時の情報、たとえばどんな治療をして、どんな薬を飲んでいたかなどをきちんと伝えてあげないと、外来治療にスムーズに移行できません。また、その患者さんの病気が再発したり、体調を崩されて再入院になった時に、病院での治療がスムーズに進まないケースが想定されます。逆に、そうした患者さんの情報のやり取りが、調剤薬局の薬剤師さんと私たち病院薬剤師の間で共有できていれば、シームレス（切れ目のない）な診療が可能になります。今現在は、トレーニングレポートを薬局の薬剤師さんが病院の医師や病院薬剤師に伝えてくださっていますが、お互い顔の見える形で連携を深めていければ、そのやりとりや情報交換がもっと進むのではないかと考えています」

津田教授は、地域との信頼関係を深めるためにも「退院時指導」のやりとりを、近隣の調剤薬局との間でももう少し密にしたいと考えている。

そしてもう一つ、力を入れたのが薬剤師の確保、育成だ。津田教授によ

れば、福井県は病院薬剤師も、薬局の薬剤師も「足りていない状況」にあるという。一般的には、薬局の薬剤師はある程度確保され、病院薬剤師が不足しているのが全国的な傾向だが、福井県は両方とも不足しているのが現状だ。福井大学に「薬学部がない」ことも少なからず影響しているが、いずれにしても全県的に薬剤師を確保し、育成していくには、病院薬剤師会と薬局薬剤師会が「手を取り合って改善していく環境をつくらないといけない」時期に来ている。

「当院の病院薬剤師43名のうち、9割が地元出身者です。この人たちは県外の薬学系大学を出て、県内で薬剤師として働きたいという人たちです。県内に薬学部を新設することは難しいとは思いますが、県外の薬学系大学を出て地元・福井で働きたい人を確保していくには、やはり県や病院薬剤師会、薬局薬剤師会が連携して、受け皿を作っていく必要があると思います。お互い顔の見える関係を築いておくことで、今後そうした連携がスムーズに取れるように努力していきたいと思っています」

高度な薬物療法を支える専門家集団をマネジメントする。津田教授の挑戦は、まだ始まったばかりである。

想いを伝える、

変わりゆく時代に 新しい医療を

この度、第11号を発刊することができました。
取材に協力していただきました医療者の方、
協賛して頂きました企業様におかれましては
心より感謝申し上げます。
今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社募集

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo
✧ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ✧

力を貸してください。

医療を支える。 人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。

しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで

私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。

医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。



「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

スギ薬局グループ



詳しくは WEB へ



neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

福井県内で活躍する医療従事者に焦点を当てた地域密着医療情報誌として、県内の医療機関へ3カ月に一度配布しております。
最先端医療から地域医療、また人々の暮らしに寄り添うクリニック、在宅医療・福祉など幅広い分野を取り上げております。
この雑誌が福井県内の医療者と医療者を結ぶひとつの情報ツールとなり、福井県の医療活性化に少しでもお役に立てることを目的としております。

バックナンバー紹介

